

# 橋詰広場施設の研究

下町3区(墨田・江東・中央)の震災復興橋梁を事例として\*

A Study on Facilities of Bridge Head Plazas

- Three Downtown Areas (Sumida, Kouto and Chuo Wards) in Kanto Earthquake Reconstruction -\*

高畑充宏\*\*・伊東 孝\*\*\*

By Mitsuhiro TAKAHATA\*\*・Takashi ITOH\*\*\*

## はじめに

都市の景観整備を考えたとき、都市空間のもつ役割は非常に大きい。景観を考える上で、水辺や緑の多いオープンスペースは、欠かすことのできない要素である。水辺にある橋詰広場は、集まりの場や散策の場、にぎわいの場として利用された都市空間の魅力的な場のひとつであった。

実体としての橋詰広場は江戸時代にすでに存在していたと考えられるが、用語としての「橋詰広場」は明治維新前後に定着したと思われる。橋詰広場を初めて制度化し、大きさや設置施設を決めたのは、震災復興計画である。

橋詰広場の研究としては、伊東らの震災復興橋詰広場に関する研究<sup>(1)</sup>などがある。しかし設置施設に着目した研究は、十分におこなわれていない。

本研究は、下町3区の震災復興区域内にある橋詰広場を対象に、「一橋梁に対する橋詰広場数」「交番・公衆便所など、橋詰広場の設置施設」の調査を行い、3区における設置施設数の違い、地域施設としての意義や役割、都市空間との脈絡を考察する。

## 1 橋詰広場の数

橋詰広場は、一橋梁に原則として4カ所設置されている。本研究では、橋詰広場として存在しているものは当然カウントしているが、橋詰広場の利用形態を調べるため、かつて橋詰広場だったとみなせるものや痕跡の確認できるものもカウントしている。

下町3区に分布する橋詰広場は、554カ所確認された(図1)。内訳は江東区が232カ所と1番多く、中央区(202)、墨田区(120)と続く。橋梁数も江東区(87橋)・中央区(55橋)・墨田区(44橋)の順である(表

表1 一橋梁に対する橋詰広場数と存在率

	江東区	中央区	墨田区	合計
現存する橋梁数 ①	87	55	44	186
橋詰広場の存在数 ②	232	202	120	554
1橋梁に対する橋詰広場の存在率 ③	67%	92%	68%	74%

※ ③ = ② ÷ (① × 4) × 100

1)。原則的に一橋梁には4つの橋詰広場があるので、これを元に実際の橋詰広場の存在率を計算すると、それぞれ67%・92%・68%となる。墨田・江東の2区が一橋梁あたり2.7カ所なのに対し、中央区は一橋梁あたり3.7カ所である。

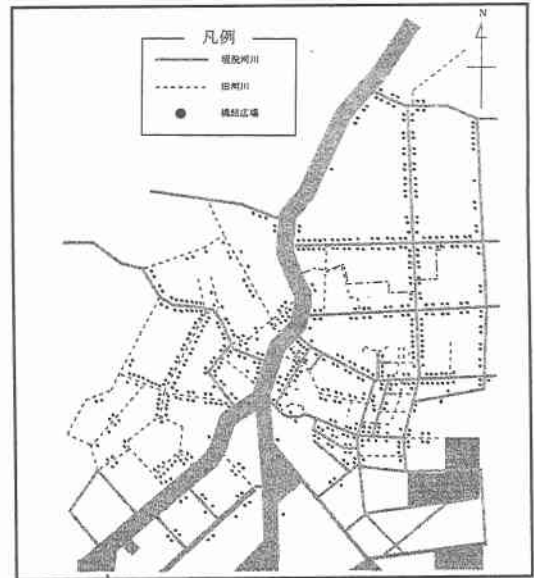


図1 現在の橋詰広場の分布

## 2 橋詰広場施設

橋詰広場に設置されている現在の施設は、39種類である(表2)。機能に着目し各施設を「3大施設」「公園内施設」「植栽」「交通」「情報」「祭事等」「企業者」「その他」の8つに区分する。

この区分の中で、防災関連納庫・交番・公衆便所の3種類の施設は、防災・治安を守るうえで欠かすことのできない施設で、歴史的にも古くから設置されているので、この3施設を「3大施設」とした。

\* キーワード: 土木史、橋詰広場、緑水ネットワーク

\*\* 学生員、日本大学大学院理工学研究科交通土木工学専攻

\*\*\* 正員、工博、日本大学理工学部交通土木工学科

(〒274 千葉県船橋市習志野台7-24-1、TEL 0474-69-5572)

1) 3大施設

3大施設が、地域施設としてどのような意義や役割をもっているかに着目して、分析を試みた。

表3は下町3区の3大施設の設置数、表4はその設置密度(1km<sup>2</sup>当たりの設置カ所)をみたものである。墨田・江東の2区は、震災復興区域内に限定した。区域内の3大施設数が判明しなかったので、区内の全数から面積割合に応じて算出した。区面積に対する震災復興区域面積の割合は、墨田区45.8%、江東区16.6%である。

消火栓が充実しなかつたところ消火には河川水を利用したので、橋詰広場には消防用ポンプが設置されていた。やがて消火栓施設が充実すると、消防ポンプの器具納庫は防災関連納庫に変わっていった。

防災関連納庫は、橋詰広場以外にも設置されている。橋詰広場の防災関連納庫数と下町3区のそれとを比較すると、墨田区8(うち区域内68)・江東区9(49)・中央区21(66)となり、橋詰広場の防災的意味あいは少なくなったと考えられる(表3)。さらにこれを設置密度でみるとより明瞭である。いずれの区も橋詰広場より区域内の設置密度の方が高く、墨田区では8.3倍(橋詰広場と区域内の比)、江東区5.4倍、中央区3.2倍である(表4)。

橋詰交番は、中央区が4%、墨田・江東区は、それぞれ3%・2%である(表2)。しかし中央・江東の2区は、区域内の設置数に対して橋詰交番の割合が比較的高く、多くの交番が橋詰広場に設置されていることがわかる(表3)。また、交番の設置密度からは、中央・墨田区に交番が多く、それぞれ2.9、2.1カ所/km<sup>2</sup>である(表4)。中央区には橋詰交番が多く(1.1カ所/km<sup>2</sup>)、他区の倍である。

橋詰公衆便所は、中央区が41であり、次いで江東

区の13、墨田区の12となり、各区とも区域内の設置数に対し橋詰公衆便所が半数前後ある。橋詰広場に多くの公衆便所が設置されていることがわかる(表3)。また、橋詰公衆便所の設置密度は、中央区が3.9カ所/km<sup>2</sup>と1番多く、次いで江東区(2.0カ所/km<sup>2</sup>)・墨田区(1.9カ所/km<sup>2</sup>)の順である。公衆便所は、区域内にしる橋詰広場にしろ中央区が最も多く充実していることがわかる。

全体的に3大施設が最も充実しているのは、中央区といえる。

表3 下町3区の3大施設数(橋詰広場と震災復興区域)

	墨田区	江東区	中央区
防災関連納庫	8 (68)	9 (49)	21 (66)
交番	3 (13)	4 (5)	12 (30)
公衆便所	12 (18)	13 (28)	41 (73)

( )内が区域内の数

表4 下町3区の3大施設密度(橋詰広場と震災復興区域)

	墨田区	江東区	中央区
防災関連納庫	1.3 (10.8)	1.4 (7.5)	2.0 (6.3)
交番	0.5 (2.1)	0.6 (0.8)	1.1 (2.9)
公衆便所	1.9 (2.9)	2.0 (4.3)	3.9 (7.0)
震災復興区域面積	6.3 km <sup>2</sup>	6.5 km <sup>2</sup>	10.5 km <sup>2</sup>

( )内が区域内の設置密度  
単位:カ所・km<sup>2</sup>

2) 公園内施設

砂場・ブランコ・滑り台・シーソー・その他の遊具は少なく、3区とも5%以下である(表2)。各区とも橋詰広場を児童公園として積極的に利用する意向はあまり感じられず、公園の3種の神器といわれる、砂場・ブランコ・滑り台のうち1つでも設置されている橋詰広場は16カ所、1カ所の橋詰広場に3種類すべてそろっているのは4カ所であった。橋詰広場ではなく橋梁単位でみても、3種類すべてそろっている橋梁は6橋にとどまっている。

橋詰ベンチは各区とも15~25%と比較的多く、休息の場、憩いの場として重視されている。照明灯も17~23%と、20%前後ある(表2)。また、ベンチ

表2 3区にみる種類別橋詰広場施設数

区分	3大施設			公園内施設							植栽		交通		情報			警備等		企業者				その他														
	防災関連納庫	交番	公衆便所	砂場	ブランコ	滑り台	シーソー	その他の遊具	ベンチ	噴水	照明灯	全体植栽	部分植栽	植栽間通路	駐車場	出入口ランプ	地下鉄出入口等	電話ボックス	文化財等説明版	記念碑	地蔵尊・道祖神	旗ポール	社	電気専用地	ガス専用地	水道専用地	N T T専用地	電気専用橋	ガス専用橋	水道専用橋	N T T専用橋	資材置場	親水通路入口	その他				
墨田区(橋詰広場118)	8	3	12	6	4	6	3	5	18	2	20	66	19	26	2	0	0	1	4	3	20	5	1	7	0	36	3	19	6	1	2	22	0	6	1	21	6	
江東区(橋詰広場226)	9	4	13	5	2	4	0	5	57	1	51	56	82	46	1	0	0	4	2	9	24	4	0	5	12	11	4	37	5	0	6	44	14	3	2	66	17	
中央区(橋詰広場274)	21	12	41	4	7	4	1	12	57	3	46	31	82	92	19	6	7	1	13	43	13	15	3	7	4	5	33	8	2	0	0	0	6	0	2	6	0	4
	8	4	15	1	3	1	1	4	21	1	17	11	30	34	7	2	3	3	1	5	16	5	1	3	1	2	12	3	1	0	0	2	0	1	2	0	1	

注 下の段の数値は各区の橋詰広場に対する存在率(%)

のある橋詰広場には、以下にみるように照明灯が設置されている割合が高く、ベンチと照明灯は対に設置される傾向が見受けられる。原票で確認すると墨田区は照明灯が17カ所、そのうちベンチのある橋詰広場が12カ所でその割合は70.6%、江東区は照明灯56カ所、ベンチ34カ所で割合は60.7%、中央区は照明灯53カ所、ベンチ32カ所で割合は60.4%となる。

### 3) 植栽

植栽は、図2のように「全体植栽」「部分植栽」「植栽間通路」の3種類に分類し、これを基本イメージとして現地で分類した。中央区は「植栽間通路」が34%と最も多く、江東区は「部分植栽」36%、墨田区が「全体植栽」56%となり、各区ともはっきりとした違いがみられる(表2)。

中央区では「部分植栽」と「植栽間通路」を合わせると64%になり橋詰広場を単に植栽地としてではなく、人々に解放した空間とし整備している。

墨田区は「全体植栽」が56%もあり、相対的には、他区の倍である。江東・中央区にくらべ墨田区は橋詰広場を活性化させる計画思想が少ないと考えられる。江東区は「部分植栽」が36%ある。橋詰広場のポケットパーク的な利用が、比較的多いためと考えられる。



図2 橋詰広場内の植栽のイメージ図

### 4) 交通

墨田・江東区は、駐車場がそれぞれ2%・1%あるのみで、交通区分は中央区に多い(表2)。

中央区は駐車場が7%、首都高速道路の出口ランプ2%、入口ランプ3%、地下鉄出入口等が3%、全体で15%を占める。これは中央区の大きな特徴であるが、出入口ランプなどが橋詰広場施設といえるかという疑問はある。河川や掘割が埋立てられ高速道路となったように、橋詰広場もまた高度経済成長時のモータリゼーションの犠牲になったのである。

### 5) 情報

情報区分は、総体的に橋詰広場が利用されている施設で、墨田・江東区は掲示板が、それぞれ17%・11%、中央区は記念碑が16%と多い。情報区分の5種類の施設(ポスト・電話BOX・記念碑・文化財等説明版・掲示板)のうち、どれか一つでも設置され

た橋詰広場は、墨田区(22.5%)・中央区(22.3%)・江東区(16.1%)となり、橋詰広場がコミュニティや情報機能の場になっていることがうかがえる。

### 6) 祭事等

各区とも全体的に0~6%と比較的少ない。老朽化したため取り壊された物、朽ち果てたままになっているものもある。しかし、地藏尊や社は地域のシンボルであり、碑も道路元標(日本橋)などに代表されるように全国的に知られたものもある。

### 7) 企業者

「企業者」の9種類の施設中、どれか1つでもある橋詰広場は、墨田区(60.4%)・江東区(44.2%)・中央区(15.4%)の順で、中央区は墨田・江東区に比べ圧倒的に少ない。これは都市のライフラインをどう形成してきたかという大事な問題を提起しているが、詳細は今後の課題にしたい。

### 8) その他

墨田・江東区では河川を埋め立て、親水公園にしている河川が多い。それら親水公園へのアクセスは、ほとんどが橋詰広場である。このために墨田・江東区には、親水通路入口が多く、墨田区は18%、江東区は29%となっている。この他、橋詰広場に時計・オブジェ・スピーカーなどが設置されているところもあったが、ほんの一部である。

## 3 橋詰広場の新しい展開

### 1) 各区の展開の違い

昭和20年代、幹線道路以外の橋詰広場の管理は東京都から区へ移管され、橋詰広場の容態は区により少しずつ違ってきた。

墨田・江東区は河川を埋立て親水公園にしているところが多く、橋詰広場を親水公園の入口にしている。中央区は、

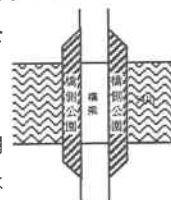


図3 橋側公園

右岸と左岸の橋詰広場をつなぎ、橋の外側に細長い広場である橋側公園(図3)をつくり、他区にはない利用形態をしている。下町3区の橋詰広場は埋立てに伴って変化したと考えられる。墨田・江東区は、親水公園を設けることによって人々の集まる賑わいの場を提供し、その出入口として積極的に橋詰広場を利用している。中央区の橋側公園は、河川を埋立ててつくられた首都高速道路の代償行為とも考えられる。

## 2) 新しいネットワークの登場

震災復興計画により橋詰広場の設置が制度化され、同時に下町に網の目のように存在していた水路・幹線街路の街路樹・公園そして橋詰広場によって、震災復興当時には「緑水ネットワーク」が形成された(図4)。近年ようやく、水辺と緑を一体的に計画するようになってきたが、震災復興計画では橋詰広場を結節点とし、水辺と緑そして街並みを都市空間の中に有機的に結びつける方式が考えられた。しかし現在では、震災復興当時から違った新しい「緑水ネットワーク」が形成されている(図5)。

墨田・江東区では、河川を埋立てて親水公園にしているところがあり、大きな特徴の1つになっている。この2区では、親水公園と親水通路でネットワークが形成され、それらの入口として橋詰広場が利用されている。人口通路として橋詰広場を利用する方が、あらたに上地を購入する必要がないので好都合と考えられたにちがいない。

さらにこれらのネットワークは、東京都が行っている隅田川の水辺のテラス軸へとつながり、より広域的な水辺の場と親水公園ネットワークへと展開している。区の親水公園・親水通路から、隅田川の水辺のテラス軸に直接連動していない場所も一部あるが、このようなネットワークの登場は区と都の計画が連動したものである。

復興当時のネットワークとはちがう新しいネットワークの登場であり、都区の施策が意図的ではないが結果的にうまくいった例である。今後は意図的に連動させ、区の親水公園と都の水辺のテラス軸を施設として直接つなぐだけでなく、デザインの的にも相互の関係性が明らかになるような計画が必要である。

おわりに

下町3区の橋詰広場は、一橋梁に墨田・江東区が2.7カ所、中央区が3.7カ所設置されている。設置さ

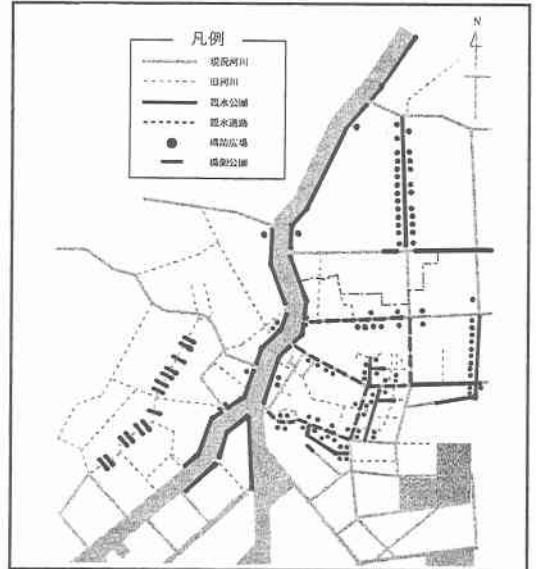


図5 隅田川左岸の親水公園と親水通路入口および右岸の橋側公園の分布図

れている施設は39種類ある。本論文ではこれを8つに区分した。

「3大施設」は中央区に充実している。「公園内施設」では、ベンチと照明灯が対になっている傾向がみられた。「植栽」では各区ごとに地域的な特徴がみられた。「交通」については中央区以外、高速道路のランプや地下鉄出入口等に利用している例はなく、これは都心3区としての中央区の特色である。「情報」は総体的にみてあまり多くはない。「企業者」は墨田区が圧倒的に多い。

中央区の左右の橋詰広場をつなぐ橋側公園、墨田・江東区の親水公園のネットワーク化を推進している橋詰広場のように、今日、橋詰広場の利用は様々である。なかでも江東区・墨田区で計画されている、橋詰広場をつなぐ親水公園と親水通路のネットワークは東京都の水辺のテラス軸と連動して、大きなネットワークへと展開している。しかしながらこのような施策は、河川や掘割を埋立てておこなわれているので、水辺の喪失につながっていることも忘れてはならないだろう。

## 参考文献

- (1) 伊東孝・岡田孝「震災復興橋梁の計画とデザインの特徴—旧東京市内における復興局架設橋梁を中心として—」、『第4回日本土木史研究発表会論文集』pp.59-70, 1984.
- 伊東孝祐「橋詰広場の空間的扱いとその利用形態—旧東京市市街地を例として—」、『都市計画論文集』No.26-A, pp.43-48, 1991.11.
- (2) 伊東孝『東京の橋—水辺の都市景観』鹿島出版, pp.200-203, 1986.